

一枚のカードを受け取った老人は、それを優雅な手つきで懐にしまい……その冒険者服も一見周りの普通の冒険者とデザインは合わせてあるが、仕立てと生地は素晴らしさはよく見れば丸わかりであり、その上魔法防御もたっぷりとかかっている。

昔から……お洒落でしたわよね……。

いつ如何なる時にでも、服へのこだわりは忘れない、そんな男であることをフェリシアはうつすらと思い出していた。

辺りを睥睨し、ゆったりと歩いているとまるでここが王宮の豪華な回廊であるかのようだ。そんなところを歩き慣れている様な佇まい。その目が、ふとフェリシアを捉えた。

「おお！　ここで邂逅出来ようとは！　フェリシア先輩よ！お久しぶりでございます、だな！」

まだフェリシアは目を真ん丸に見開き、バンズに食いついたまま固まっていた。先輩？

「いや、いずれは顔を見せようと心していたのだから、こんなに早くご尊顔を拝謁出来ようとはな。お導きに深き感謝を……」

ここに腰掛けることをお許しただけですか、と柔らかくフェリシアに語りかけ……そのくせ返事を聞く前に、するっと前の席に座り込んでしまう。

否、の言葉などあるはずがない、と確信しているような動き。

ようやくとバンズを口から離し、顰めた声で囁いた。

「……何故このようなところに……しかもそのようなご服で？……いつぞやのお話はお断りさせていただいたはずですが……」

「ああ。あのような琐事、忘れてかまわん。あの安普請はなんかの保養施設として、なんだかに活用するようじゃ。解体して売っても良かったんじゃがの。まあ、奥方のご機嫌取りに汲々としておる旦那はいくらでもいるからのう。それよりもっとざっくりと話しかけて欲しいぞ。フェリシア先輩」

は？

「伏せている、ということじゃ。もう、以前のわしではない。今はただの一文無し
の老体駆け出しG級冒険者じゃ」

へ？

フェリシアの頭の中がくらくらとした。もう朝食の続きは忘れていた。
一体どういうことでしょうか？

ガリアニア公爵さま？

「老境に至り、一から人生やり直したくなった、と言う所じゃな。軍務の奥深い
密やかな部屋に籠もること幾数十年……現場、と言うものをあまり見ずに過ごし
てきてしまった……幸い僅かながらの功を得るも、見失っているものがあつたの
ではないか……見損ねてしまっているものがあつたのではないかと。一念発起、
今までの垢を捨て！ 新たな！一兵卒の！身として！無一文から！残りの人生を
構築してみようと思ひ立ったというわけじゃ」

フェリシアの胡散臭げに見つめる半目には一ミリの変化もなかった。

それ……どこまで本気ですか？ そもそもなんですか、その仕立てのいい、泥の
シミ一つ付いていない冒険者服は？

無一文？ は？

想像もしてなかったド新人冒険者ジジイの出現に、一目見て、あっちゃあ……と
言つてフェリシアがかくりと首を落とす。

するり、と立ち上がり、テーブル越しにその長い背を伸ばすと、その顔を伏せた
フェリシアの耳元で囁く。

「……このように下卑た……野卑な男共に身体を売っておつたのだな……くく……
……妄想が捗るのう、至高の淫女よ……聖なる娼婦よ……たまらん……わしもその
列に並ぶぞ……あ、あとクエストとかいうのを教えてくれんかの？何をどうする
のじゃ？」

「お、フェリシア。なんだその爺さん。あんま見ねえな」

ぞろぞろと現れた冒険者の一群が、フェリシアを見かけて話しかけてきた。

「おお。冒険者の諸先輩方よ。わしはアーマンというものじゃ。今日からこのグラドマグアス・ギルドで冒険者として働く身じゃ。G級だかなんだかでの。ご先輩方の手厚いご指導、ご鞭撻賜れば幸甚じゃ」

「お、おう……ご丁寧にどうも」

また、変わり者のジジイが増えたな。

ま、そんなものはここには掃いて捨てるほどいるのだが。

「なんなん？ 知り合いか？」

「役者クセえな。背も高けえし。ドサでも回ってたか」

一人の冒険者がそのガリアニア公を指さす。

どきり、とした。かつてあの場所でそのような振る舞いをすれば……。

冷たい笑みでじっと見つめられ……その者は次の日から姿を消す。

フェリシアはそんな冷徹な一面も見ていた。

だが、今はスツゴいにつこにこで微笑んでいる。暖かいと言ってもイイほど、朗らかに。

「そうだな背え高えなあ。ちつと痩せすぎだが。もうちつと喰った方がいいぞ」

「剣とかは一応持つてんな。よし。ま、どんだけ使えるか知らんが」

「冒険者やんのか？ ジジイからじゃ厳しいぞ？」

「フェリシアのこと知ってるっばいが……客か？」

苦り切った声で応えた。

「……スツゴい昔のね」

この新人冒険者ガリアニア公が、森のこと、クエストのこと、そこで起きる危機総てに於いて無知であり、一歩踏み込んだときから未知の危険に直面するであろうコトは目にも明らか。

森にすら入ったこと無いんじゃないかしら。

超巨大、大邸宅内の借景として作られた森とか以外には。

それだって疑わしい。

きよとん、として、なんかじりじりしているフェリシアを見つめている。

ああつ。もおつ。しょうがないんだからあつ。

フェリシアは一度受けた依頼をキャンセルすべく、渋々と立ち上がり、受付の方に歩き出していった。

そのぷりぷりと動くお尻を嬉しそうに目を細め、ガリアニア公が見送る。

「来るのっ。今からいろいろ教えますからっ！」

受け直したクエストはスライム狩り。もうこれは、まだコドモと言ってイイほどの駆け出し冒険者用のクエストだ。

チュートリアルのようなもので、これでクエストの一連の流れを覚えていく。

なんと言ってもご老体だ。それも頭脳労働専門と聞いている。

体力的なことも考えてのフェリシアのチョイスだった。

ボードの前に立ち、すらりと背の高い老人の顔を見上げながら、フェリシアが優しい女教師のように柔らかい声で告げた。

「じゃ、まずこれから始めます。一番お安い仕事ですけど……ガリ……こほん。

あ、アーマンお爺ちゃんは……それでよろしいですねっ？」

ガリアニア公を一日こき使って銅貨三枚、というのは冒流的であるような気もしたが！

アーマンお爺ちゃんなのだから。ここでは。

「うむ。よろしくご指導いただきたい。フェリシア先輩っ」

にっこにこで微笑んでるガリアニア公に、軽い頭痛を覚えるフェリシアなのであった。

スライム五匹……狩れるかしら……。

「公爵様。本気で冒険者としてやっていくおつもりですか？」

もう森の中で二人。取り繕う必要も無い。口調は少しだけ元に戻っていた。

「公家の一切合切はフルトンに引き継がせた。今のわしは無一文の駆け出し冒険者じゃ……老境になり放り出され身一つとなり、ここから厳しい厳しい冒険者としての生計を立てていかねばならん……心優しい先輩冒険者の助力を是非にも……

：頼みたい所なんじゃがのう……」
ちらつ、ちらつ。

その手は判ってますっ。もうっ。半目のフェリシアがじとつと睨む。
無一文とか、そんなわけないでしょ、そんないい服着てっ。

「ナールズマンさんも……何処かに居るんじゃないでしょうね」
森の木々の何処かにあの忠臣極まる老執事のすらりとした影があるような気がして、思わずきよきよと探してしまう。

「いやいや。あやつはフルトンの教育係、補佐という重要な役目がある。わしはただ一人……、ここに流れ着いた孤独な老人じゃよ……ごほごほ」
まーた。そんなこと言ってるっ。
とは思いつつ。

この年で逃げ回るスライムのあとをあわあわと追いかける姿を見ると、ついつい同情心が湧く。

「そこっ！核を突くのっ。それで仕留められますからっ……ああっ！素手で触っちゃダメっ……かぶれますよっ」
痺れスライムと毒スライムと普通のスライムの区別すら付かない。
当たり前だ。何もかも初めてなのだから。

一応、手は出さずにガリアニア公に全てを任せるが……どうにも危なっかしい。
自分のナイフで自分の手を切っちゃわないか、ぐらいにたどたどしい。
見てるだけでハラハラしてしまう。もう。

むおおおー、と叫びながら、ぴよんぴよんと逃げ惑う小さなスライムをどたとたと長身の爺さんが追っていく。

ぶすり、と差したナイフがその核を突いた！ 殆ど偶然に。
ぴー、と儂げな声を上げて、スライムがどろりと溶ける。

「うむ！ 仕留めたり！ どうじゃ？ フェリシア先生っ」
核を突いたナイフを満足げに見つめ、ふう、と額の汗を拭う。
それは実に楽しそう。嬉しそう。

やったぜ、という冒険者の始源の愉悦。小さな小さな始まり。
それを見つめているフェリシアの顔も、困り顔ながら、呆れ顔ながら、ついついふんわりと綻んでしまうのだった。

痺れスライムの毒に触ってしまった手をフェリシアの指導を受けながら、清水で洗い流していく。

「ようわからんからセットでくれ、とアイテム屋に言い。

「駆け出しか？ ジジイのようだが……んじゃこれだ、と出してきた初心者用冒険セットをろくに見もせず買い。」

「ポーシオンはどうする？ 少し高いぞ、と言われ。」

「うむ。一揃い小さいのを頼む、とそれも追加で買い。」

「腰のポーチから一つの瓶を取りだし、うろんにラベルを見るとおもむろに、ぱきり、と封を切り、飲もうとする。」

「ああっ……それは、毒消しポーシオンですけどっ。飲むヤツじゃないのっ。掛けるタイプのヤツっ。飲むんなら回復ポーシオンはこっち。ねっ。飲めないのはこれで……飲んで効くのがこれとこれだから……」

「懇切丁寧なフェリシア先生の指導の下、軽く痺れた手に毒消しポーシオンを掛けていく。」

「おお……痺れが取れたぞ。さすがフェリシア先生！」

「きらきらした目で、ばっ、とフェリシアの顔を見つめてくる。」

「そういうものなんです。使ったら必ず買い足しておかなきゃダメですよ。いい？ 忘れないでね。忘れると思わぬところでアブないんだから。無くなったらもうその日のクエストは終了、ってとこまで厳しいモノですから。そのクエスト達成してもして無くても撤退です。ちゃんとそこは一線を引いて、ねっ」

「うむ。わかったぞ。フェリシア先生」

「熱心な生徒ではあった。」

「じゃ、予備はアタシが持つてるから……もうすこし、続けましょうねっ。あと三匹だから。頑張っつてね。あまり不用意に触ったりしたらダメよっ」

「うむ、と、初心者冒険者、ガリアニア公は満面の笑みで力強く頷いた。」

「作戦立案畑に閉じこもってないで、剣術の方も磨きを掛けておくべきではあったな。今から鍛えてどこまで行けるか……ん。寿命の限り、精進を重ねるとする」

か！」

なんて殊勝なことは言っている。どこまで本気が疑わしいが。

山道も歩き慣れていないせいか、時折よろけ、ああ……腰が痛い、などと呟く。もう。しょうがないんだからあ。

フェリシアがその長い腕の下に入り、担いで支えてくれる。

と、背けた顔の下で口端がにやりと歪む。一瞬だけ。

くると振り返る笑顔は感謝の念一色だ。

「おお。フェリシア先生。ご厚情悼み入る」

「ここ登り切るまでよっ……もうっ」

肩を借りる長い腕がさりげなくフェリシアの乳房にかかる。下から包むように広げた指がかかってしまう。

歩く揺れがその指先に巨大なふくよか極まりない盛り上がり、たまらない柔らかさ、重々しさを伝えてくる。

さりげなく。さりげなく。

深謀遠慮。奇策のガリアニアとかつての軍司令部に名も高い、ガリアニア公のその身体を張った同情引き作戦が炸裂していたのであった。

まったく……こんなところで何やってるんでしょ……。

オトコの人に肩貸して……森の中歩いて、坂登って……これ、何の為やってるんだっけ？ 何でこうなったんだっけ？

まったくへんなお爺ちゃん……さりげなくを装ってるけど！アタシのおっぱいさわさわしてんの判ってるからねっ……もうっ。

元からちよつとへんだったけどいよいよへんな。

へんなお貴族サマ……こんなトコまで来て、冒険者やるとか。

権力とか権益とかお金の力とかっ！いっぱいあるんじゃないのっ？ あるはずでしょっ。

……大貴族サマ……のハズなんですけどね。あん。もうっ。もつと強く触つてくるようなら、この腕外しますっ。何かぴりぴりしてきちゃったでしょっ。

身体が思い出していつてるみたい……もうっ。

歩く度、ちよつとちよつと揺れる度……さわさわされる度……

昔散々、後ろからいじられたの……身体が覚えてるんだから……

散々揉み尽くされたの……いっぱいいいじめられて感じてたの……ぞくぞくが蘇つてきそう……きつとこのあとほうなじをいっぱいキスされて舐められて……

だめ……やっぱりこの手の大きさ、何処かで覚えている。この骨張った指の感触……おっぱいが覚えてた……

もうっ！……この坂、上がりきつたら。

地面に放り出してあげます。もうこれ以上はダメ。

まったく……こんなトコで何やってるんでしよう。アタシたち。

逃げ出したはずなのに。

もう会うこともないって思ってたのに。

思いも寄らない形でまた逢うことになっちゃって……。

貴族って辞めるって言えば辞められるものなの……かしら？ そんなわけないけど……無いと思うけど……このヒトのやることだから……出来るの？ ホントに？

こんな国中に名の轟く大貴族なのに。辞めちゃってイイの？

アタシの知る限り、まさに貴族、で。

大貴族そのものの方で……それなのに、なんかちつとも貴族らしくないヒト……貴族過ぎて貴族らしくない？ まったく。

へんな……お爺ちゃん。

貴族なんて大嫌いだったはずなのにね。

大嫌いだったはずなのにあんなことになって。

でも今。

こんなトコでこんな形で肩組んで歩いている、だなんて。